



「きらら秋の学校」報告

Kilala Autumn School Report

1 日目

水中昆虫観察

イトトンボやゲンゴロウの幼虫、水蜘蛛、ゲンゴロウ、興味のある子は配布したポケット図鑑と見比べては楽しそうに観察していました。もちろん蛙などもいて、せんぎの水とどこで覚えたのか(奥地先生の講座で習ったこと)花崗岩とその粒子を入れ、最後に蛙とゲンゴロウを水槽の中に入れていました。

秋の素材を拾って貼り絵を作る

女の子達はせり田の帰り道に、紅葉した落ち葉やススキ、栗やドングリなどを拾い集め、それをつかって図書館で裕美さんを中心に貼り絵を作りました。なかなかの傑作ができました。家に持ち帰る子供もいたのですが、残った作品は直売所に展示します。

森の探検

男の子は裏の森からせんぎに出て、水の流れに沿って牛舎と鶏舎まで歩きました。途中、どんぐりや栗を投げ合ったりして探検を楽しみました。はしゃいでせんぎに転げ落ちる子供が2名。



奥地さん講座

はじめにフィールド見学、小沢のループ橋の展望台で甲斐駒ヶ岳を見ながら南アルプス天然水を飲む。次に尾白川に移動。2か所にて水と花崗岩、白州の地形の話など。その後、図書館に帰っての講義。質疑応答などディスカッションは白熱し盛り上りました。

夕食作り

大根、ほうれん草を収穫。自分たちで火をおこし、野菜や肉を切って鍋(じょうろ鍋風)にして食べました。

11月の3、4日にきらら秋の学校が開校されました。参加した15名の子供達はいつもながらパワフルで、収穫や採卵をもっとやりたいと言う声が目立ちました。



収穫祭と天体観測

図書館のシアターで体や言葉を使った3〜4種類のゲームをしました。最初から最後まで大騒ぎで盛り上がり、閉めに「もみじ」を歌い、最後に焼き芋を食べてお開きになりました。

この企画の前後に小原さん、奥地さんが用意してくれた天体望遠鏡で昴や色々な星座を見つけては2人から星の話を熱心に聞いていました。アンドロメダ星雲、火星なども探していたようです。

2 日目

作務〜採卵、かぶの収穫

大型鶏舎とスミエ鶏舎での採卵。ベルトコンベアの採卵と比べると鶏に囲まれての採卵に子供達はエキサイト! 最初は怖がって入りがらない子供もいましたが、なんとか中に入り頑張って採卵しました。

落ち葉集め

裏の森で落ち葉拾い。予想以上にたくさんの落ち葉を集められ、みんなで鶏舎に敷きました。

芋煮の準備

横手の赤羽かしさんの畑で長ネギ、畑シメジ、里芋を収穫させてもらい、前々日に山で採れたチョコ茸、クリ茸などもたくさん入れ、具ださん水団芋煮でした。

荷造り〜掃除〜作文

お土産は大根、ジャガイモ、かぶ、しめじでした。

2008年1月4日(金)〜7日(月)に「きらら冬の学校」が開催されます!

冬の甲斐駒ヶ岳で、餅つき、天体観測、スキー、せり田でスケートなどが予定されています。

詳細は、 <http://www.hakusyu.jp/kilala/>

お問い合わせはお電話か、電子メール info@hakusyu.jp にてお受けします。また右のQRコードを読み取っていただくことで、携帯電話からも「きららの学校」の最新情報をご覧になれます。



きらら新聞 No. 38

「子供は自然な存在」

2007年11月30日

都会と大人の社会は人工的な社会でそこには自然が存在しない。とりわけ、都市社会と文明は、自然をことごとく排除し、人間がつくったもの――人工的なもので成立している。しかし、子供は自然な存在。自然な存在である子供が人工的な社会に閉じこめられ、苦しんでいる。子供は自然な存在なのだから、人工的な社会と自然、都市と農村を行ったり来たりして育つのがいい、と養老先生がどこかで書いていたと思います。また、小さな子供たちに対しては、自然の中で遊び、学ぶ、彼らのあとをついて歩いてやるだけでいい、と。とても共鳴する言葉でした。

西欧のキリスト教世界で子供が愛くるしく、可愛い存在となったのは、ルソーの「エミール」を読むまでもなく、歴史的に見れば最近のことのようです。彼らにとって、人間は生まれながら「原罪」をもっているとされています。だから子供は「悪魔が棲みつきやすい存在」「大人を困らす者」として捉えられ、悪魔を追いつくことを目的(?)に親のドメスチックバイオレンスにさらされていたそうです。

逆に日本では「子供が第一に大切にされる社会」で幕末に日本にきた西欧キリスト教圏の人にとってとても奇異で新鮮に映ったようです。例えば参勤交代の大名行列も道で遊んでいるハイハイ状態の子供を道路脇にいていねいこどかして、進んでいったようです。日本人が忘れてしまった大人社会と子供の関係は渡辺京二さんの「逝き世の面影」に書かれています。

現代の子供たちは、屋外で遊んだり、親の代わりに買い物に行ったりすることも世界的に大幅に遅れているそうです。

ここ白州横手の村里と自然が最低限、子供たちのアジールとして機能し、白州の自然が本当の滋養となるよう務めていくことが私たちの「仕事」です。

写真は森を散策する子供に秋山校長がついていっている光景です。低学年にあっては、この光景が教育の原型のように思います。

椎名盛男



2007年8月 きらら夏の学校で
(子供たちと秋山校長)

※アジールとは、「聖域」「自由領域」「避難所」「治外法権が認められた地域」などの特殊なエリア。アジールとされた地域には、神社・仏閣などの聖地の要素を持つ場所などがあつた。

「武川中学校へいってきました」

高草木里香

去る9月28日、武川中学校の3年生（1学年約30名）に、「環境」をテーマとした総合学習の授業で、白州郷牧場の循環型農業について、お話しする機会をいただきました。武川町は白州町のとなりに位置し、同じ北杜市内にあり、武川中学校は農場からは車で10分くらいの距離にあります。

授業では、農場やキララの学校の写真を見てもらいながら説明をしました。また、鶏舎の床の発酵した鶏糞堆肥や、菌体、せんぎの枡にたまった花崗岩の砂、味噌、醤油、納豆、チーズなどを持っていき、触ったり、においをかいでももらいました。また、キララの学校でもやっているように、せんぎの水と、水道の水をオルトトリジン試薬で塩素反応をみて比較しました。土ができていく過程、水がつくられていく過程、発酵がすすんでいく過程を、あえて、現物をみながら、いい土、いい水とは？野菜や土や水はどうやってできるのか？を、あらためていっしょに考えてみました。そして、どうして循環型農業に取り組むのかということを知ってもらいました。大変緊張してのぞんだ授業でしたが、振り返って見ると、この「あえて」現物を持ち出した、というのがよかったようです。

というのは、事前に担当の先生から、「すごくいい子なんだけど、シャイな子供たち。保育園からみんなずっといっしょだから、お互い主張しなくてもわかりあっちゃっているからなのかもしれない。だから、質問しても答えが返ってこないかもよ」といわれていたからです。

私にとって、地元の子供たちと話をすることは初めての経験でした。都会の子供たちにとって当たり前のことが、当たり前じゃない（ことが多い）白州。白州で当たり前なことが、都会では当たり前じゃない（ことが多い）。でもこの白州（武川）で育った子供たちにはどうなんだろう？しかも、中学3年生に限って話をしたこともないし、と、闇夜を手探りで歩くような気持ちで大変緊張しておりました。

もう発言がないなら、強制的に指名してしまえと、こちらからどんどん質問をしていったのですが、堆肥や菌体のにおいをかいだり、触った子供たちからは、田舎で育った彼ららしい、経験にねざした、生き生きとした反応や答えが返ってきたのです。

菌体の臭いをかいでもらって、どんな臭いかを質問すると、

「ぬかみそみたいなにおい」

鶏糞堆肥の臭いをかいでもらったら

「土のにおい」

という答えが返ってきました。都会の子供たちの多くからは鼻をつまんで、「くさい」という答えが返ってくるのが常です。

また、「野菜をつくるのには何がある？」と聞いてみると、

「水、土、種、日光、肥料」等、という答えがずっと返ってきました。

「大武川で泳いだことある人？」

と聞いたら、大半の子が手をあげていました。

都会の子達とちがい、この子供たちにとって、この地の土や水は、遠いところにあるわけではなく、当たり前のものでしょう。とてもびっくりしたし、ほっとしました。

わたしとしては、その、彼らにとっては当たり前の土や水が、よそにはない、いかに貴重なものか、伝えたいと力んでいったわけですが、そんなことはいうに及ばず、彼らのほうが、その価値を、わたしよりずっと身にしみて、知っていたのかもしれない。

ただ意外にも、あらためて、砂や土や、堆肥や、菌体や、水を見て、触ってもらうと、なかなか興味深げによく観察してくれていました。彼らにとっては当たり前のことを、あらためて切り取って、地道に現物にあたってみてみるというのは、デジタルな現代っ子たちには逆に新鮮だったのかもしれない。これから、子供たちと学んでいくときに、実際の事物や原風景から学ぶということは、あらためて大事なことだと思いました。

聞入者のわたしの発するへんな質問に、恥ずかしそうながらも、素直に答えてくれた、とっても素直で仲がいいクラスメートたちのことを、担当の先生は、これから高校に進学し、今までとはちがったいろんな環境でそだった子供たちにもまれていくときが心配と話していました。確かに、わたしが中学のころと比べると、状況がちがうとおもいます。わたしたちのころは、同じ世代の子供たちが経験することや、触れる情報の幅は、それほど大きくありませんでした。部活や、学校の行事、受験など、体験することはほぼいっしょで、テレビのチャンネルも今のように多くなかったし、情報といえば図書館くらい、おなじようなテレビやラジオをきいて育ってきた友達とつきあってきました。本やCDひとつとっても、物理的に近くにある本屋やレコード屋からしか買えない。簡単にダウンロードなんてできない。いろんな理由から制限されていることが多かった。いまはずっと多様です。そしてなんでも簡単に手に入るように思います。携帯やインターネット、いろんな情報に触れて、それぞれ多様な経験をし、考えていることも多様。だからこそ、ぶつかったりたたかれること覚悟で表現して、分かり合っていく、かつ打たれづよくなるということは、これからの時代こそ必要なサバイバル能力なのかとも思いました。自分の世界に閉じこもって生きることは一見できるかもしれないけれど、生きていく以上、一人でなんて生きてはいけないのだから。そしてそれは石油文明が前提です。

わたしのほうこそ、彼らから教わることがたくさんありそうです。地元の子供たちと触れる貴重な機会をいただき、感謝申し上げるとともに、これからも、こういう機会をもてたらうれしいと思います。

「環境」をテーマに
総合学習



「韓国 山（サン）自然学校と ブルム農学校を訪ねて」



キララの学校事務局長
秋山澄兄

10月7日から11日の5日間ほど韓国に行ってきました。

今回の目的は梧山（オサン）にある自然学校と、ブルムにある農学校の訪問です。

初めに釜山国際空港から車で北東へ二時間余り、東テグと言う地方都市から20分ぐらいの山逢いの静かな村に到着。

そこには廃校になった小学校を利用して設立された「山（サン）自然学校」があります。

きららの学校をモデルに2002年に前身の「梧山（オサン）自然学校」として設立され、3～4日間のキャンプを通して自然体験等を通じた教育を始められたとのことです。

きらら夏の学校に韓国の小学生が数回参加交流したことがあります、ここの関りから始まった参加交流です。

ここでは自然とその生態系との関わりを中心に様々なプログラムが生まれ、年間3000人の子供が訪れます。

常勤講師と数十名の非常勤講師やボランティアスタッフにより運営され、子供だけの学校でなく親子教室などもあります。自然・環境・生態系はもちろんのこと、音楽や工作を学ぶことのできるプログラムなども導入されています。

きららと大きく異なるのは農作業がプログラムに組み込まれていないことでした。学校を管理する方のお話だといずれ農作業のプログラムも常時できるような環境を整えてきたいと話していて、実際裏庭に家庭菜園があり、大根と唐辛子の栽培をしていました。また学校のすぐ近くに廃業した農家の家と土地が確保され、来年には農業プログラムが動き出すとのことでした。きららと大きく違う点はもうひとつ、2007年より代案学校（注釈1）としてその名前を「山（サン）自然学校」とし、小学1年生の生徒22名、常勤講師5名で生活を共にし、通常の教育課程に加え、宇宙の授業や調理実習など、すべての授業に自然・環境・生態系との関わりや取り組みを織り交ぜながらの教育がなされているのです。

学校内の施設には教室、図書館、宿舍、特別なものとしては自然・環境・生態系を学ぶ為の施設として大きな食堂の調理場排水を利用した排水処理施設が

あり、処理水はビオトープ（注釈2）に利用され、その中の生態系を学ぶことができるようになっていました。ここではBMWの技術が利用されていました。池の中に浮草、鯉、蛙、タニシ、その他の水中生物を観察できるようになっていて、きららにある「せり田」と同じように子供達が観察し学ぶことができます。ここでは排水を利用している点が印象に残りました。さらに校庭にある便所（生態トイレ）の排水を利用した生物活性水施設、自分達の尿や糞が生物活性水となり圃場還元などされ、循環できることを学ぶことができます。これは非常に大きなポイントだと思います。



キララでは自分達の出した生ゴミを菌体と混ぜ攪拌機で一時発酵させ鶏の餌にする過程を子供達に見せていますが、ここの取り組みは非常に参考になりました。

付近の裏山には青鷺の繁殖地があり、自然のままの生態系を学ぶこともできます。

きららでは今年の夏の学校からエネルギー（主に石油）について考え始め、薪を使って火をおこし、その熱で夕食を作るという試みを始めました。

奥地先生による石油エネルギーに関する講座を受けることができ、少なくとも文明社会は石油社会でもあり、その石油がいずれ枯渇するということを知り、私達が普段からどれだけ石油エネルギーや石油製品に依存して暮らしているかを知りました。また木炭、食塩水、アルミホイルを使って電気を作るプログラムを導入しました。

ここ山自然学校では太陽光発電（ソーラーシステム）と風力発電を使って電力をまかっています。

2つの施設を合わせ100%の電力をまかっているとのことでした。さらに余電力は電力会社に売っているとのことで、写真にある大きな太陽光パネルは校庭の正面に設置されていて約三キロワットの電力供給ができます。風力と合わせ四キロワットの供給が可能ということなのです。この後に紹介するブルム農学校でも同じ光景を目にしたのですが、韓国では自然エネルギーに対する考え方・取り組みが日本より進んでいて、それを実感することができました。これから石油がなくなっていくことがわかった今、日本も見習うべきことであり、またきららでも避けては通れない課題点でもあるだろうと思うのです。山自然学校のように



教育現場の中でエネルギー発電施設を持ち、それを直に学ぶことのできる環境は素晴らしく思えました。きららでも導入を考えて行けたらと願っています。身も心も技も自然の営みの中で循環して生きて行くこと、それに加えてエネルギーを自分達の手で作り出すことがこれからのテーマになって行くでしょう。私の仕事はBMWの技術を利用したプラントを作ることですが、今までは農業を始め、生活環境を豊かにして行くことメインですがこちらでもエネルギーに関する関心度を高めて行かなければならないと思っています。高めるだけの時間はもうないのかもしれない。

翌日はブルムと言う所へ移動しました。最初に訪れた梧山から東テグへ出て、そこから電車を乗り継ぐこと約4時間。

洪城（ホンソン）と言う町に着き、そこから車で2～30分のところにあります。この地域は有機農業が盛んで有名な所でもあり、主な生産物は合鴨農法を使った稲作です。その村の小高い丘の上にブルム農学校があります。

ソウルからだ電車約2時間、まっすぐ南に下ったところに位置します。

きららとブルム農学校はこの10年、相互に訪問し

合い交流を重ねてきました。（きらら新聞28号参照）ブルム農学校は45年の歴史を持つ民間の私学校で、公立高校に対して、代案（もうひとつの）学校です。ブルム農業技術学校は高等部と大学課程があり、高等部には1学年25人、計70人～80人の生徒がいます。先生・学校職員をいれて100人の学校です。

大学課程は高卒の子や大人が農学と哲学を学べる「専攻部」として、生徒数は11名、先生10名です。白州でもキララだけでなく、「農学校」の設立を目指しており、大学課程のミンチョル先生からは「いろいろ悩まないで早く農学校宣言を！」と数年前に白州に訪問された際に激励を貰いました。それはさておき、ここでもソーラーシステムが導入されていて、太陽光発電で70%の電力をまかっています。先にでたミンチョル先生の自宅では100%の電力だそうです。

さらに学校だけでなく地域のあちらこちらで太陽光パネルと風力発電の施設を目にすることができるのです。この農学校は地域との関係を大切にしています。学校と生協、そして地域の人々が一緒になって地域作りをしていました。

稲作の研究を学生と農家の人が一緒になって取り組みを始めていました。学校生協には学生だけでなく地域の人達も買い物に訪れます。きららでも子供達と村の人たちとの交流が大切なことのひとつとなっています。

今回の2つの学校の訪問はとても有意義なものでした。きららの学校のベーシックな面をあらためて認識できたと同時に未来のきららも見えた気がしたのです。無農薬有機・環境そしてエネルギー、日常教育でも大きく取り入れ始められていると聞きます。きららではそれら身をもって体験し学べる環境を作って行けたら良いと思います。今すぐにできることから取り組んで行かなければならないのではないのでしょうか。

注釈1： 韓国では、フリースクールやオルタナティブ・スクールを代案学校という。一二年ほど前に、大学受験に偏重した既存の教育に疑問を投げかける代案教育運動から生まれた。小規模で都会から離れた自然豊かな場所で、寄宿生活を伴う事例が多い。山自然学校は国の認可は受けていないため、中学校にあがるためには学歴取得の試験が卒業時に必要になる。無認可の代案学校に入った子供達のほとんどは中・高等学校も代案学校を選び、高校課程卒業時に日本で言う大検のようなものを受け合格すると小学校から高校までが学歴として認められる。

注釈2： ビオトープ（Biotop、ドイツ語）は、バイオトープ（biotope、英語）とも表記し、生物群集の生息空間を示す言葉である。日本語では生物空間とも略される。語源はラテン語とギリシア語からの造語で、「bio（いのち）+topos（場所）」である。自然学校の施設は人工的に生物群の棲息場所となるよう環境を整備した場所で正しくはバイオガーデンと言う。この呼称は日本ではあまり浸透しておらず、日本ではビオトープ言う場合はバイオガーデンのことを指す場合が多い。